

## 令和2年度 静岡学園中学校・高等学校 自己評価

本校の教育理念	1. 自主自立の精神 … 自分で考え、判断・決断し、混沌とした社会で自立して生き抜くための「自主、自立の精神の尊重」 2. 共生の精神 … 地球上の全人類が地球規模の課題を協力して解決し、すべての生命がともに生きていくことを願う「共生の精神」の尊重 3. 真理と生命を尊ぶ精神 … 生命の尊厳に対する畏怖の心と人間としての誇りを持ち、私利私欲なく真理を追究し、真摯に社会に貢献しようとする「真理と生命を尊ぶ精神」の尊重 4. 進取の精神 … 新しい時代を見据え、どんな課題が起きても果敢に解決し、進歩させようとする「進取の精神」の尊重
本校の教育目標	1. 真のエリートの育成 … 知性・品性・高い倫理観、崇高な使命感を持った真のエリートを育成する 2. 地域社会に貢献できる人材の育成 … 郷土愛と地域愛を育て、様々な形で地域社会に貢献できる人材を育成する 3. 国際社会に貢献できる真のリーダーの育成 … 多様な価値観、幅広い教養とコミュニケーション能力を身につけ、日本文化を理解し、国際社会に貢献できる真のリーダーを育成する
教育の特色	これからの未来社会が抱える複雑で解決困難な課題を克服できる人材を育成するために、高校には全国初となる「教養科学科」を設置。従来の普通科以上に幅広く、深い知識とともに、領域横断的な視野を身につけ、「自ら考え、論理的に思考・分析し、知識を統合する力を養う。教養科学科として、本校独自の特徴的な専門科目を履修・修得していく。また、外部講師及び本校教員による「シズカウ・ゴールデン・タイム(SGT)」は正規の授業ではないが、生徒にとって貴重な学びの機会となっている。その他にも、国際交流をはじめとした多彩な学びのプログラムが用意されている。

達成度 A ほぼ達成(8割以上) B 概ね達成(6割以上)  
C 変化の兆し(4割以上) D 不十分(4割未満)

学年 教科 分掌	担当	No.	令和2年度重点目標	具体的施策及び計画	達成状況(重点目標を達成するためにに行った具体的事項)	達成度 A・B・C・D	
学	中学部	1	生徒・保護者から信頼される、安心・安全な学びの場を提供する。	ア) 生徒の様子の情報収集(目録・声掛け・孝友日誌等)を丁寧に行い、小さな異変を早期に発見する。生徒の成長を考えて適切な指導を行う。 イ) 生徒指導上の情報を中学部内で確実に共有し、場合によっては高校にも協力を仰ぎながら、チームとして指導に当たる。 ウ) 「中学部通信」等を用い、保護者が校内の様子をより深く知る機会を充実する。日頃の保護者との連絡についても、丁寧な対応をこまめに行う。	ア) 生徒・保護者から上がってきた相談・依頼に対して、HR担任任せにせず学年全体、中学部全体でフォローしていくような態勢作りを行った。 イ) クラッシャーを有効活用して、日頃の学習活動の様子をできるだけ保護者に発信するように心がけた。 ウ) 問題のある生徒の情報を中学部で共有し、必要のある生徒に対して、積極的にカウンセリングを活用するよう促した。	A	
		2	生徒に、将来の静学のリーダーに相応しい生活習慣と学習習慣を身に付けさせる。	ア) 生徒が基本的な生活習慣を身に付けることの大切さに気づき、実践できるように導く。教員も大きな声で生徒と挨拶を交わす。 イ) 生徒に家庭学習の習慣を身につけさせるため、朝学習や補講等を計画的に行うとともに、きめ細かな学習指導を行う。定期試験前などには計画的な学習を生徒に促す。 ウ) 英語教育の充実を図り、3年修了までに英検準2級の取得率6割、2級の取得者10名を目指す。	ア) 定期テスト前に勉強会を実施し、3時間静かに自習する習慣を身につけるようにした。 イ) 毎回の朝テストに対し、再試験や補習等を行い、学習面でやり残しのない状態をつくることを心がけた。 ウ) 孝友日誌を活用して、生徒とのコミュニケーションを図った。また、問題の早期発見にも利用した。	B	
		3	総合的な学習の時間、SGT、特別活動を充実し、「知る」「考える」「表現する」を楽しめる生徒を育てる。	ア) 総合的な学習の時間や広島平和学習、自然体験教室を通して、生徒が郷土・日本の歴史・文化について理解を深める。また、中高生新聞と「教養科学の樹」を活用したNIE学習のさらなる充実を図る。 イ) SGTや特別活動など教科以外の活動にも積極的に取り組むよう生徒を促す。希望参加制のSGTの中学生平均参加率が2回となることを目指す。 ウ) 総合学習や特別活動(静学祭、体育祭、合唱コンクール、修学旅行など)における集団活動を通して、生徒はリーダーとしての心構え、とるべき行動を学ぶ。学年をまたぐ行事や交流活動では、3年生は縦のつながりの中でリーダーとして機能し、下級生は上級生を手本とし、全体を見渡して判断できる視点を養う。	ア) 修学旅行・自然体験教室等、新型コロナウイルスの影響で中止せざるを得なかった行事について、できる範囲でその代替えを試みた。 イ) 他学年の企画のノウハウを共有し、相乗効果でよりよいものになるように工夫した。 ウ) 活動を通して考えたことなどをまとめ、新聞に投稿し、掲載されることが1つの動機づけとなるように活用した。	B	
	高校1年	学	4	生徒が安心して生活できる環境を築き、学校生活の基礎を確立する。	ア) 日頃の積極的な声かけや面談、クラッシャーや孝友日誌の活用などにより生徒の不安や悩みにも気配りしながら生徒との信頼関係を築く。 イ) 生徒に関わる様々な情報を共有し、学年全体で生徒の学校生活をサポートする体制を築く。 ウ) 学校生活におけるルールを守るよう、学年で統一した指導を行う。	ア) クラス担任を中心に、常に生徒の様子を注視し把握に努めた。(日常) イ) 朝のあいさつ、昼の見回り等を学年部全体で行った。(日常) ウ) 様子の気になる生徒の情報を学年全体で共有し、必要があればカウンセリングへとつなげた。(日常)	B
			5	授業・家庭学習など基本的な学習習慣を確立し、高校での学習のペースを築く。	ア) 授業において学習の基礎・基本の徹底を図りながら、生徒が目標を持って積極的に授業に取り組む雰囲気を作り出す。 イ) 目的を明確にして朝学習、週末課題等を計画的に実施しながら家庭学習のリズムを確立し、フォローが必要な生徒に対してはしっかりと指導をしていく。 ウ) 外部模試で偏差値54以上の生徒が100人以上であることを目指す。	ア) 週末課題の量を把握し、生徒にとって適切な量の課題を課すよう調節した。(週末) イ) 長期休暇時には課題一覧を、テスト前には各教科の試験範囲をまとめて、生徒が学習に取り組みやすいよう提示した。(長期休暇、テスト前) ウ) 朝テストを中心とした学習の習慣化に努めた。(各教科)	B
			6	部活動・SGTなどの様々な活動に積極的にチャレンジさせ、それらの経験を通じて人間力の向上を図る。	ア) 生徒に様々な活動の場を提供し、かつ情報発信をただでなく、積極的に活動する生徒を紹介していく。 イ) ポートフォリオを活用し、様々な取り組みに対して振り返りを確実にに行わせる。 ウ) 緑風塾やLHRの活動を計画的に実施し、広い視野で進路意識を持てるようにする。	ア) 三密を避けながら、必要に応じて学年集会を開催し、生徒の気持ちを前向きにするよう働きかけた。(2月) イ) 体育祭のエントリー種目について、HRで意識的に時間を取り話し合いの場をつくった。また、学年種目の練習を体育の授業内で積極的にに行った。(10月) ウ) 部活動顧問と緊密なコミュニケーションをはかり、生徒の状態を共有するよう努めた。(日常)	B
高校2年	学	7	生徒および保護者が安心できる学校生活を提供する。	ア) 生徒一人ひとりに目を向けたきめ細かい学級運営・学年運営。 イ) 生徒に関する情報の共有。 ウ) ルールやマナーを守らせる指導、教室整備の指導を厳しく行い快適な生活・学習環境をつくる。	ア) 様々な悩みを抱える生徒に対して日誌を通したコミュニケーション、積極的な面談を行った。担任だけでなく、クラス・教科を超えて多くの教員が関わりそれぞれの個性に合った対応ができた。 イ) 学年部会や養護教諭、スクールカウンセラーとのミーティング、ケース会議など定期的かつ、状況に応じた情報共有ができた。 ウ) 年度初めに比べれば落ち着いてきてはいるが、遅刻の常習者が多く、継続して指導が必要である。	B	
		8	生徒に2年生としてふさわしい学習習慣を身につけさせる。	ア) 朝学習や週末課題への取り組みを向上させる。 イ) 孝友日誌、Classi、家庭学習調査や授業を通して生徒の学習生活を把握し、適切なアドバイスを行うよう努める。 ウ) 学力層に応じた指導を行い、上位層の増加、下位層の底上げを図る。	ア) 日常の学習のペースメーカーとして毎日朝学習・朝テストを実施するとともに、週末課題などに取り組みせ、取り組みの甘い者にはやり直しなどの指導を行った。 イ) 家庭学習記録シートや孝友日誌への記入を行い、日々の学習時間や生活の振り返りを行った。また、定期試験後には試験の振り返りシートに記入させた。 ウ) 成績不良者へのサポートに多くの先生が力を貸してくれた。一方で上位者に対しては、英語の補講のみにとどまり、国語・数学・英語の足並みが揃わなかった。	B	

	9	生徒の進学に対する意識を高める。	ア) 外部模試の結果や面談等を通じて生徒の進路希望をできるだけ細かく把握し、適切な指導に当たる。 イ) 進路系の行事・講座等の機会を設けるだけでなく、SGTなどへの積極的な参加を促す。 ウ) 大学の公開講座やオープンキャンパスに関する情報を提供し、積極的な参加を促す。	ア) 予定外の河合塾全統模試も校内実施し、多くの生徒が自身の実戦力・応用力の確認ができた。 イ) LHRや進路講演会などの機会を利用したり、学問・学部、大学調べなどの機会を設けたりして、コロナ禍の中でも工夫して指導ができた。 ウ) ZOOMを利用して大学説明会・オープンキャンパスへの参加などを促し、積極的に情報収集し、進路について相談することができた。	B
高校3年	10	安全安心な学校生活を送る。	ア) 孝友日誌や面談を通して信頼関係を築き、生徒の気持ちに寄り添った指導をする。 イ) 生徒の健康と安全を第一に考え、何かあった場合は素早い対応を心がける。 ウ) 問題を抱える生徒に対する情報を共有し、学年全体で対応を図る。	ア) コロナ禍の中、教室の換気や消毒、マスク着用など、感染防止に努めると共に、互いの健康に気遣いながら学校生活を送れるよう声がけをした。 イ) 孝友日誌や面談を通して、学校生活や進路に関する生徒の不安を軽減できるよう努めた。精神的な問題を抱える生徒には複数の教員で素早く対応できるようにした。 ウ) 問題を抱える生徒に対する情報は毎回の学年部会の他、教育相談連絡会を通して管理職および生徒部長、養護教諭、スクールカウンセラーとできるだけ広く共有するよう心がけた。	A
	11	学力を伸ばす。	ア) 基礎基本の徹底を心がけた丁寧な指導を行うとともに、入試対策にも務める。 イ) 下位層の底上げをめざし、自発的な学習と動機付けを促すよう努める。 ウ) 進路系SGTを充実させ、生徒の希望に応じた講座を実施する。	ア) 年度初めの休校期間の補いや入試対策演習のため、平日の放課後や土曜日、特別授業の午後や家庭研修期間も含め、多くの教科で補講型SGTを実施した。 イ) 年間予定に組んでいた外部模試はできるだけ実施するとともに、予定外の模試も生徒の希望に応じて校内実施し、学力の伸長を実感できるよう努めた。 ウ) 放課後や長期休暇中に教室で自習をしたいという生徒が多数いたが、コロナ禍もあり、希望通りに対応することが十分にできなかった。特に、休校中の学習環境を整えることが難しかった。	B
	12	明確な目標を抱いて自己実現を果たす。	ア) 進路に関する情報を収集、学年で共有すると共に生徒保護者にも発信する。 イ) 目標を明確にさせるための助言を惜しまず、前向きに努力させるよう努める。 ウ) 国立大学100、難関私立大学100人以上の合格を実現させる。	ア) 進路に関する情報を収集し、学年で共有するとともに、学年集会やClassi、Classroomを通して生徒や保護者にも発信するよう努めた。 イ) 2年の終わりから3年の初めにかけての進路指導は休校のために計画通り行えなかったが、授業再開直後から面談を重ね、生徒の気持ちに寄り添った丁寧な進路指導を行った。 ウ) 教科担当ははじめ多くの教員が様々な形で個別指導を行い、生徒一人一人が目標に向けて前向きに努力できるよう指導を行い、多くの生徒が希望の進路を実現することができた。	B
国語	13	自らの目標に向かって主体的に学習に取り組む生徒の育成	ア) 個々の生徒のレベルや要求に応じたきめ細かい指導を各学年で協力して行う。 イ) 朝テストや週末課題の実施など、家庭学習の充実を促すための指導を1年次から計画的に行う。 ウ) 共通試験の平均得点が、探究系140点、その他の系110点以上になることを目指す。	ア) 各学年の担当者が積極的に連絡を取り合って授業を進め、成績不振者への指導も協力して行った。 イ) 各学年で、朝テストや週末課題を計画的に実施し、基礎学力の定着を図った。 ウ) 共通試験の目標を、概ね達成することができた。	B
	14	新入試や新指導要領への対応を見据えた、効果的な指導方法の開発と授業改善	ア) 活発な言語活動を通して、生徒自らが課題を見付け、主体的に解決する資質や能力を育てる授業を実践する。 イ) 校内外の研修や研究会に積極的に参加し、新入試や新指導要領に関する情報収集に努める。 ウ) 週一回の教科部会の時間を活用し、教材研究の充実を図るとともに、授業実践や研修の成果を共有する。	ア) 生徒による意見の発表や課題解決を意識して授業を行う教員が多かった。 イ) コロナ禍により教員の研究授業を行うことは出来なかったが、教科部会において情報共有に努めた。 ウ) 週に一度の教科部会において、授業進度や教材研究に関する情報を共有することができた。	B
(地歴・社会)	15	生徒の学ぶ意欲、主体的に学習に取り組む姿勢の育成	ア) 因果関係を重視することによって、生徒の「思考力」を育成する。 イ) 各科目の授業において、プレゼンテーションやレポート作成など、生徒の主体的学習の機会を設定する。 ウ) 各教員の授業の魅力が高めるための研修を積極的に行う。	ア) それぞれの授業の中で実践することができた。 イ) コロナ禍による制約はあったが、高1グローバル・ヒストリーを始め、各授業においてプレゼンテーションや探究的な学習を行った。 ウ) 指導力育成研修、オンライン授業研修を実施し、各教員の授業指導力を高めることができた。	A
	16	新入試や新指導要領への対応を見据えた授業の改善	ア) 研究会に積極的に参加し、「大学入学共通テスト」および新指導要領についての情報を収集する。 イ) 各科目の知識を関連付け、社会に見られる課題の解決に向けて考えさせる授業を行う。 ウ) 言語活動を充実させることにより、考察を深めるとともに効果的に伝達する力を育成する。	ア) コロナ禍の中で制約はあったが、オンラインの研修会等での確に情報を収集し、対応することができた。 イ) SDGs等を意識することにより、社会問題解決の解決策を考えさせる授業を行うことができた。 ウ) コロナ禍による制約はあったものの、それぞれの授業の中でプレゼンテーションやレポートを取り入れることができた。	B
	17	大学入試に対応できる学力の育成	ア) 朝テストや補講系SGTを積極的に活用する。 イ) 生徒のレベル別指導や個別指導を行い、生徒の学力に応じたきめ細かい指導を行う。 ウ) 大学入学共通テストにおいて、探究系は平均70点、探求系以外は平均55点を目標とする。	ア) 補講や朝テストによって、高校3年生の授業進度の確保、受験対応を確実に行うことができた。 イ) 個別指導や、レベル別・志望校種別の補講を行うことにより生徒のニーズに対応することができた。 ウ) 各科目の難易度のばらつきを考慮すれば、ほぼ目的を達成することができた。	A
数学	18	自ら学ぶ意識を持ち、主体的に学習に取り組む生徒を育成する。(指導に関する事柄)	ア) 高校においては「授業」「週末課題」「朝テスト」、中学においてはそれに対応する教育内容の『運動』を強く意識し、実践する。 イ) 個々の生徒のレベルに応じた、きめ細かい指導を実践するため、「問題集」と「参考書」の選定と活用法を議論する。 ウ) 生徒に数学の面白さを認識させ、生徒の探究心を高める内容豊富な授業を実践するため、教材や授業展開などの工夫について研究授業などを通じて情報交換する。	ア) 中高ともに「運動」を意識した指導が定着してきている。 イ) 副教材の選定や活用法という点の議論はさらに深くしていかなければいけない。 ウ) コロナ禍の制約があり常勤教員による研究授業は出来なかったが、教育実習生の研究授業を通して情報交換をすることが出来た。	A
	19	教員の教科観の統一、授業内容・指導方法・評価方法を検討する場として、教科部会を機能させる。(組織に関する事柄)	ア) 教科部会を議論の場とするため、事前にメールを用いてそれぞれの教員の意見・提案・検討事項を収集する。それを、教科主任が教科部会を開く前に議題や提案事項に対するお互いの意見を予め整理したものをメール配信する。教科部会を開く段階ではお互いの意見の要旨がわかった状態にしておき、すぐに意見交換ができるようにする。 イ) 教科部会において指導方法・課題の出し方・課題の取り組みませ方・評価方法の工夫の取り組みを発表し、興味深い事例を共有する。 ウ) 各学年での取り組みの情報交換・情報共有を行い、教養科学科の数学科としての指導方針「静学メソッド」を確立する。 エ) 次期教育課程に向けた情報を収集・共有する。特に統計分野に関しては令和3年度に研修ができるような計画を立てるところまでは進める。	ア) 事前連絡や情報発信が後手後手にまわってしまった。主任として猛省している。 イ) 評価については数学科教員全員で、全ての科目について確実に確認できた。 ウ) 定期的な情報交換は出来ている。 エ) 情報収集・共有は不十分であり、出遅れ感が甚だしい。	B
理科	20	緊急時の授業補填事例の蓄積と対策ガイドラインの検討	ア) 休校期間の対応について各教員から情報を収集する。 イ) 科目担当者ごとに話し合う機会を設け、課題や遠隔授業のあり方について検討を進める。 ウ) 教務課と連携し、遠隔授業における授業単位数等について検討をする。	ア) 収集できた。 イ) 担当者間で今年度実施した内容を精査および新たな方策について検討を進めることができた。 ウ) 静岡県内におけるコロナウィルスの蔓延が落ち着いたため、具体的な検討には入らなかった。	B
	21	新入試および新学習指導要領を見据えたカリキュラムの作成および授業改善	ア) 現象について正しく理解する時間や実験結果を推測する時間を、今まで以上に設ける。 イ) 身近な現象や社会的に問題となっている事象と関連付けながら授業を展開する。 ウ) 効果的なカリキュラムの編成を、他教科と連携しながら検討する。	ア)、イ) 機会を設けるように各教員が取り組んだが、コロナウィルスの蔓延により、十分な時間確保には至らなかった。 ウ) 物理基礎について検討を重ね、結論を得ることができた。	B
	22	生徒の学力向上のため、組織的な指導体制を確立させる。	ア) 共通テストの平均点を探究系は130点、一般クラスは110点を目標とする。 イ) 高校3年間を見据えた進度調整を行う。また、定期試験の範囲を2週間前に提示することを徹底する。 ウ) 英検の準会場実施を中高で実施運営する。高校1年生のGTECを12月5日に実施運営する。	ア) 探究系は達成できた。一般クラスについては、リスニングについて課題が残る結果であった。 イ) 各学年部において達成できた。 ウ) 英検については全日程を準会場実施し、問題なく運営することができた。GTECについては新型コロナウィルス蔓延防止の観点から、実施を見送ることとした。	B



教 科	英語	23	共通テストに向けたリスニングの指導方法を確立させる。	ア)木曜3限の教科部会(タクsteam)にて、情報共有と指導方法についての議論を進める。 イ)高校1、2年生のリスニング指導について、教材の運用を進め効果を検証する。 ウ)大学ごとに異なる配点比率の情報収集をし、進路に合わせたアドバイスができる環境を整える。	ア)各学年部において教材を選定し、日常の指導にリスニングの時間を取り入れた。 イ)学年間では指導方法や教材の活用方法について議論を続けた。学年を越えた議論は十分にはできていない。今後の課題である。 ウ)情報共有を教科部会の中で、高校3年生を担当する先生方主導で行なった。	B
		24	高校全学年にてオンライン英会話を実施運営し、資格試験におけるスコアの伸長を図る。	ア)高校1～3年生に対し、各クラス6回のオンライン英会話を実施・運営する。 イ)法人本部とも連携し、視聴覚室及び図書館棟の環境整備を行う。 ウ)高校3年生の実施時期について検討し、次年度に反映させる。	ア)視聴覚室にて実施し、昨年度よりも格段に安定した通信環境で実施できた。 イ)視聴覚室に絞った形で環境の整備を行なった。情報管理課の助けのおかげで環境を整えることができた。 ウ)高校3年生の実施時期と回数を改めることとした。毎年この点について議論し、より良い形にしていきたい。	A
	保体	25	授業計画に沿って共通理解の中で、生徒の運動能力・体力向上に努めるとともに、挨拶・礼儀を重んじ協力性を高めさせる。	ア)種目を偏らせることなく様々な競技に触れる機会を持たせ、授業全体の充実度を上げる。 イ)各集団の特性に合わせた授業計画や展開を工夫する。 ウ)施設の中の問題点を早めに発見し、事故のない授業を目指す。 エ)体育授業のみならず日常の生活で活かされる礼節を身につけさせる。(服装・挨拶・態度の徹底)	ア)最大限実施できた。今年度は4、5月の休校により生徒一人一人の体力低下が心配されたため段階をおって体育授業に取り組んだ。 イ)安全に注意しながら取り組めた。 ウ)教員間で情報共有しながら早め早めの対応を行った。 エ)日頃から生活状況に注意できた。	B
		26	新体力テストで優良校に入れるよう授業内での基礎体力づくりを充実させる。	ア)日頃から新体力テストの種目に合致する基礎メニューを意識して行う。 イ)生涯にわたる健康管理の観点から、バランスのとれた身体づくりを行う。 ウ)1学期で新体力テストを実施し、現状を理解させ秋までに苦手種目の向上を図る。	ア)毎授業の準備運動の中に全身運動や柔軟運動を取り入れるなど工夫した。 イ)無理のない程度で身体の様々な部分を使えるよう工夫した運動を行った。 ウ)1学期の新体力テストの全種目実施ができず数種目のみとなったが、秋の実施に向けた練習は行うことができた。	B
		27	教科書上での内容を自らの生活に生かせるように知識の定着を図る。	ア)日常生活における健康への意識を高め、自己健康管理を実践させる。 イ)運動だけではなく体づくりの基本(食事・睡眠など)を理解させ実践させる。 ウ)自己実現の方法を理解し実践させる。(人生の目標づくりの手助け) エ)より身近な具体的問題として認識し、交通安全への配慮の実践。 オ)AEDの使用法をマスターし、人命救助への知識と行動力を養う。 カ)地球環境保護の実践。(節電、ごみの分別・減量など)	ア)健康な生活習慣が送れるように一つ一つ項目について説明した。 イ)身体機能を高めるための効率の良い生活を考えさせた。 ウ)目標に向かって取り組むことで人格形成が作られるということを説明した。 エ)通学状況などを踏まえ例に挙げながら危険と安全の意味を理解させた。 オ)誰でもAEDが使用できるよう、万が一に備え救命救急について学ばせた。 カ)身の回りのことから地球環境について焦点を当てながら説明をした。	B
		29	休校中においては生徒ひとりひとり体を動かし健康維持に向けた運動をさせる。	ア)Google Classroomを使い課題の送信を計画する。 イ)補強運動やストレッチの内容については教員で吟味し、学年、性別等を加味し作成する。	ア)なるべく単純明快を心掛け、簡単な内容の送信を心掛けた。 イ)緊急事態宣言下など外出自粛をイメージし室内で行える運動を考えた。	B
	技術・家庭	30	授業を通して生活者としての問題意識を持たせ、広い視野に立つてものごとを見る姿勢を身につけさせる。	ア)グループワーク、発表を通して意見交換をさせながら、各自の考えを深めさせる。授業前と授業後の振り返りを確認する。 イ)保育実習、高齢者インタビューなどの体験学習の場をつくる。 ウ)生徒の参加型授業作りについての情報交換、研修会への積極的な参加をする。	ア)絵本作品や住居の間取り課題など写真に取り込み、お互いに評価しながら意見交換をする場を設けた。 イ)コロナ禍のため保育実習は実施できなかった。高齢者インタビューは各自実施した。 ウ)中部支部家庭科研究会のオンライン研修に参加した。	B
		31	実技・実習を通して生活的自立のスキルを身につけ、協働の力を育む。また、生活に役立つ作品作りを通して、ものづくりの喜びを知らせる。	ア)だしの授業(高校11月)、和食のマナー(中学3年12月)の実施。作業時短を取り入れた調理実習の工夫(高校1年、中学2年、中学3年)。 イ)エプロン製作(高校1年:調理実習で活用)。エコバッグ(あずま袋)の製作(中1)、ランチョンマットの染色(中2:中3の和食のマナーで活用)。生活に生かせる木工作品(中1)、LED電気スタンド(中2)、プログラミングを利用したロボットの製作(中3)。 ウ)絵本の読み聞かせと保育実習(中3:11月)	ア)だしの授業、和食のマナーの実施はできなかった。高1、中2はTTの授業形式で半分の人数制限をして調理実習を実施した。 イ)高校1年だけ予定を変更して手作りマスクを製作。中2の染色は中止。他は予定通り実施した。 ウ)コロナ禍のため絵本の読み聞かせと保育実習は中止。	B
		32	生徒が充実して安全に実習、製作に取り組めるように実習室の環境を整える。	ア)備品の整備、点検、補充。(包丁の手入れ、消耗品の補充を定期的に。ミシンの整備点検4月、6月。備品の購入は前期までに計画的に行う。 イ)調理実習室の衛生管理を実習ごとに実施。(まな板の確認、引き出しのチェック、冷蔵庫内の整理) ウ)技術家庭科実習室の用具、教材の整理。生徒作品の管理の徹底。点検ノートの引継ぎ。	ア)包丁の手入れ、消耗品の補充は適宜実施。ミシンの整備点検は8月に依頼。備品は必要に応じて購入し、3月上旬までかかった。 イ)コロナ禍での実習を計画したため、衛生管理は徹底して行った。 ウ)技術実習室は常に使いやすく整理するよう努めた。生徒作品の管理も問題なし。点検ノートの引き継ぎは徹底できなかった。ノートよりも口頭で連絡する方が確実である。	B
	芸術	33	生徒の授業での作品を展示したり発表したりして、広く芸術活動の普及に努める。	ア)二階生徒会室前での生徒作品の展示を、年間を通して常時五つ以上行う。 イ)二階生徒会室前以外の作品展示場所を、新たに一か所以上設けるようにする。 ウ)各単元で、必ず最後に観賞の時間を取り入れ、様々な生徒の作品、演奏を相互に観賞できるようにする。	ア)高校生や美術部の作品展示を、年間を通して行うことができた。 イ)新たに、3階物理実験室前、1階役員会議室前、2、3、4階トイレ前等で展示を行った。 ウ)各単元で必ず発表会や鑑賞会を行い、生徒同士の相互評価を行った。	A
34		芸術活動の知識、技能を習得しながらその文化を理解し、芸術に慣れ親しんでいく素養・姿勢を築いていくことができる。	ア)年間一つ以上日本文化、外国の伝統的な文化を単元材料に取り上げる。 イ)各単元において、教師による指導、評価に加え、生徒同士の相互評価を行うようにする。	ア)水墨画か三味線を行ったり、イタリア語やドイツ語の歌曲に取り組んだりした。 イ)各単元の最後に、必ず生徒同士が作品の鑑賞を行い、相互評価した。	A	
35		紙面やインターネットを使い、休校中の生徒への芸術活動の継続を支援する。	ア)新型コロナによる休校中も、ClassiClassroom等を使用し、月に一つ以上の課題を生徒に提示するようにする。 イ)Zoom等を使い、定期的に芸術活動に取り組むことができているか確認する。	ア)休校中も、Classroomによる課題の配信を行った。 イ)休校中にZoomによる課題の解説、確認を行った。	B	
情報	36	生徒一人一人の好奇心を高め社会のリーダーとしての人材育成に必要な情報機器を、表計算による統計処理や情報整理、プレゼンテーションによる表現の道具として適切に活用できるように育成する。	ア)中学までの習得状況に差があるので、全体のスキルの底上げができるよう丁寧に説明する。 イ)小中の学習を基礎に、身近な事例をもとに情報に関する応用力を育てる。 ウ)全体のイメージを図版やイラスト・アニメーションを用い興味を持てる学習に心がける。	ア)基礎的な内容から丁寧に扱うことで、全体のスキルの底上げができた。 イ)ワープロ、表計算、プレゼンテーションについては、実習を通じて、技術の習得ができ、他教科でも使用できた。 ウ)ワープロやプレゼンテーションソフトにイラストや、アニメーションを入れながら文書やスライドを作ることができた。	A	
	37	情報の収集・処理・表現を通して広くコミュニケーション能力を養い情報社会に積極的に参画する態度を育てる。	ア)情報の収集、処理、発信の基礎的な知識の習得およびマナーとルールを周知させ、法律についても触れる。 イ)法律については事例についても取り上げ、何が問題なのかのように対応すればよいのか考えさせる。	ア)情報機器を用いた時のマナー違反、や法律に触れる内容について実際のニュースを見ながら解説ができた。 イ)法律について事例を用いて、問題点と対策について考えさせることができた。	B	
		38	教務課から全教員への周知事項を徹底し、全教員が共通認識を持って教育活動を行ない、教育活動の円滑な推進を図る。	ア)定期試験の実施方法やルールなど、全教員が共通認識を持つため明文化したものを作成し、その時期に応じて随時情報発信を行うことで、全教員が共通認識を持って教育活動を行えるような体制を整える。 イ)常に新任の先生の目線で、いつ・どこで・何を・どのように教育活動を行うのかを明確化できるように教務課から全教員に情報を発信する。 ウ)情報の発信方法としてはメールやSchoolPadを使用するが、それらに頼らず直接コミュニケーションをとって確認し合うことも大切にする。	ア)定期試験の実施方法や成績処理方法など、全教員が共通認識を持つて行わなければならないものは、メール配信や掲示などで周知徹底を図ってきた。 イ)毎朝、教務課からのお知らせをメール配信し、その日の日課や業務内容を周知してきた。また、その時期に応じた重要な周知事項は、事前に計画的に繰り返しメールで配信することで、周知を徹底し、教員間での認識のずれを防いでいる。 ウ)情報の発信としてメールやe教務のグループウェアを利用しているが、直接の声掛けによりコミュニケーションをとって確認し合うことも心がけてきた。また、SchoolPadからe教務にシステムが変わったことにより、自習代行については「代行伝票」を作成し、直接の声掛けによる連絡と依頼に切り替えた。また、e教務への出欠の入力不備がある場合も、個別に該当の先生に声掛けて、対応してもらった。	A

教務課	39	教務備品、緑風塾・特別活動、学校行事について、教育活動が滞ることがないように、先を見通しながら管理・企画・情報配信を行う。	ア) 教務備品や印刷室内の備品・印刷用紙の状況を日々把握し、不足分を早めに補うことで、教育活動が滞ることがないようにする。また、視聴覚機器についても破損などがないか確認し、常に最善の状態にて教育活動が行えるようにする。 イ) 緑風塾や特別活動については、学年主任とも連携をとりながら生徒にとって有益なものとなるように企画し、教員がどのように運営すればよいかの情報配信を行う。合わせて学力向上につながるように各学年部や進路部とも連携を図る。 ウ) 月行事や週行事と日課について情報配信を確実にし、特に非常勤講師への日課連絡に漏れがないように配慮する。また、月末に行うe教務への出欠入力について、点検と未入力者に対する督促を確実にし行う。	ア) 教育活動に支障が出ないように、印刷室のコピー用紙の補充や発注を毎朝行ってきた。視聴覚機器については、視聴覚に関するワーキンググループと連携を取り、機器の破損修理や消耗品の発注などを行ってきた。備品管理も不足がないか定期的に補充してきているが、不足している場合の対応について今後も検討していく。 イ) 高校3年生については、土曜日を新型コロナウイルスによる休校分の補充授業を行い、休校分を取り戻すことができた。時間割をA週とB週の2パターン作成し、交互に運用することで、各科目の授業がバランスよく補うことができた。高校2年生以下の緑風塾や特別活動については、休校による予定の変更もあり、模索しながらの運用である。 ウ) 月行事予定表は、①原案を提示し修正箇所を取りまとめ、②修正版を提示し確認をとり、③決定版の配信 という運用に変更したことにより、各部署で点検する機会が増え、決定版のあとで訂正版を出すということがなくなった。さらに、非常勤講師へは非常勤講師用の週行事予定をメール配信と掲示で情報配信を行ってきた。	B
	40	教務課内の協力体制の強化に加え、日課業務について情報管理課や研修課とも協力体制を築き、関連する業務を共有し協力体制を整える。	ア) 教務課全教員が教務課として行う任務を可視化し、常にだれがどのような業務を行っているのか把握できるようにする。また、お互いに業務の進捗状況を確認し合えるようにする。 イ) 日課業務など教務課以外の人材と協力体制を強化するため、年間の教務課スケジュール表と日々の業務内容をまとめたものを作成し、業務を可視化することで先を見越して業務を行えるようにする。 ウ) 授業日は朝7:30に集合し、日課・時間割変更・代行を確認し合う。また、時間割作成や試験本部の運営などチームとして行う業務については、役割や業務内容の採配を工夫し、チームとして有機的に機能できるようにする。	ア) 授業日は毎朝7:30に集合し、日課の確認を行ってきた。また、年度初めには、年間の教務部の業務内容を可視化し、いづどのような業務があるのかを確認した。時間割作成や定期試験の運営など、チームとしての業務が行えるように採配を工夫してきた。 イ) 教務部長・教務課長・情報管理課長・研修課長の4者で定期的に打合せを行ってきた。これにより、それぞれの課の立場で何をすべきか、今後はどのような準備が必要かを把握することができた。	A
	41	静岡県「ICTを活用した教育」推進計画・法人の新高校整備計画・情報セキュリティ基本方針・インフラ整備提案依頼書などに従った情報システムを構築する。	ア)・インフラ整備 ・生徒用のPCを十分に活用できるようにする。 イ) 校内無線LANの拡充を図り、各々の情報を活用する能力を高める。	ア) インフラ整備 生徒用のPCを十分に活用できるようにする。 イ) 成績データ(Classi, e-教務)の管理 学年ごとの分担できめ細かく対応する。 ウ) 休校期間中の遠隔授業体制の敏速な対応(ZOOM/Googleclassroom)	A
		教務課・研修課・進路課と連携し、各アプリケーションにおける操作、データ連携を高める。	ア) 出欠・成績データ・Classiの管理・・・学年ごとの分担できめ細かく対応する。 イ) 学年上げの処理の担当を決め、担当を中心として行っている。	ア) 見通しのつかない休校期間中、突然の遠隔授業の実施における、システムの構築(情報管理課)使用法の研修(研修課)、時間割の作成(教務課)と、連携が保たれた。 イ) 昨年度まで使用していた教務システムSchoolPadに変わり、e-教務への完全移行できるような形で出欠、成績、成績表、通信票、調査書、指導要録などスムーズにできる体制へすんできた。 ウ) e-教務の実力テストの設定から運営、Classiへの結果のuploadなど、情報管理課、進路課との間で、操作連携、データ連携がおこなわれた。	A
情報管理課	42	教員のデジタル格差の是正と、データ処理技術の普及。	ア) 機器活用のための情報を会議・メールなどで発信していく。 イ) 各種研修会を企画し、Classi, e-教務, school Padの使用方法についてわかりやすく普及していく。 ウ) データ変換などの方法について実際に作業しながらスキルを上げていく。	ア) 旧教員iPadを生徒用に転用し、オンライン英会話、家庭科、保健科他多くの科目で使用。 イ) 生徒用PC40台×2クラス同時授業運用について(昨年の上流のL3スイッチに続き、中流の各階EPS内にあるL2スイッチなども大きいものにした。) ウ) 休校期間中の突然の遠隔授業や、Classi接続不良時のclassroomへの対応は、各教員が初めての経験の中多大な協力のもとで実施できた。	A
	43	教員自ら授業に対する検証を行い、授業改善および授業力向上を図る。	ア) 授業評価アンケートの結果から課題を把握し、PDCAサイクルを実践することで授業改善を図る。また、必要に応じて管理職面接を実施する。 イ) 公開授業週間を実施。また、外部講師を招聘しての研究授業を実施し、授業の講評、検討会をお願いする。 ウ) 初任・若手教員に対して、管理職、教科、学年部などからのサポート研修や助言を積極的にし行う。	ア) より効果的な授業改善につなげるために、授業評価アンケートを全面的に刷新した。 イ) 研究授業については、新型コロナの感染者数が下火になっていた時期を見計らい、新任教員などの必要最小限のみを実施した。	B
	44	他校訪問や様々な校外研修・校内研修により、教員の資質能力の向上を図る。	ア) 教科ごとの他校での授業参観企画を促すとともに、資質向上に資する校外研修や自主的研修を奨励する。 イ) 他校の授業参観については管理職に相談し、紹介を請う。 ウ) 教員の要望を把握し、必要な校内研修を企画する。	ア) 校外研修については、新任研修や5年研など、必要最小限の参加であった。 イ) 校内研修についても、新任教員対象のものなどの必要最小限にとどめた。 ウ) 他校訪問は自粛した。	C
研修課	45	教務部の各課と連携し、円滑な業務遂行を図る。	ア) 教務課との連絡を密にすることで、研究授業や研修時の時間割変更を確実にし行う。 イ) 情報管理課と連携し、研修コンテンツの拡充を図る。	ア) 教務課とは授業変更等で連携し、教育実習や研究授業において関係教員がスムーズに参観することができていた。 イ) 情報管理課とは教員全体研修における「e教務」の説明会等で連携した。スムーズな校務運営に効果をあげていた。	B
	46	生徒の自主性、主体性の育成を目指した生徒指導。	ア) 生徒会活動への指導と支援により、生徒の自主性・主体性を育む。 イ) 風紀委員による呼びかけ・見回り等を行い、生徒同士で直し合う雰囲気づくり。 ウ) ボランティア活動の指導と支援により、生徒の自主性・主体性を育む。 エ) 部活動の活動や大会・発表会のアナウンスを積極的にし、お互いに応援し合う雰囲気づくり。	ア) 今年は、中々行事ができない中で、体育祭、球技大会を生徒会・体育委員会を中心に工夫して行った。(A) イ) 風紀委員の朝礼(ZOOM)での呼びかけ、風紀委員の各クラスでの呼びかけ活動を行った。(B) ウ) 休校中のマスク作りのボランティア活動など、動きが取れない中活動を行った。(B) エ) 各種大会の中止、延期が数多く出てしまい、本年の部活動間での応援し合うといった活動はできなかった。(D)	B
	47	学校生活における基本的な生活習慣の改善サポート。	ア) ルールの可視化・明確化、風紀委員の活動をより活発に行い、生活習慣の改善を促す。 イ) 投稿指導による交通指導・声かけ運動の継続、学校周辺の見回りにより、学校生活に対する基本的な生活習慣の基盤、安全を確立する。 ウ) 生地研・校外教育連盟等を通じた他校・外部団体・警察との連携体制を構築する。	ア) 風紀委員長や風紀委員の呼びかけ活動を実施。(B) イ) 登校時の交通指導を毎日実施した。(A) ウ) 本年度は、生地研・校外教育連盟等の全ての会合が中止となってしまった。その代わりに、近くの高校との情報交換は個別に行った。(B)	B
生徒指導課	48	健康的な生活のために必要な自律的態度と健康維持・増進を図る習慣を養う。	ア) 各種健康診断の実施 イ) 日常における観察(HR、授業、課外活動、保健室入室等)による健康状態把握 ウ) 健康維持のための指導・助言	ア) 各種健康診断の実施にあたっては、コロナの関係で全ての検診について再調整を迫られたが、全検査項目について終了した。(A) イ) 日常における観察による健康状態把握に関して、コロナ関連による生徒の特別な変化はみられなかった。例年と違う点は、健康調査票の毎日のチェックをクラスにお願いした点、e教務の出欠管理が安定していない関係で、保健室で出欠を記録するようになった点である。(A) ウ) 健康維持のための指導・助言については、今年度に関しては、コロナ感染症対策のための内容になった。(B)	A
	49	感染症の予防及び対策の充実。	ア)「保健だより」、啓発ポスター等の活用 イ) 生徒会保健委員会の啓蒙活動 ウ) 感染状況の目に見える化、除菌スプレー・手洗い消毒液等の設置、感染症対策に基づく拡大防止	ア)「保健だより」、啓発ポスター等の活用は例年通り行った。(B) イ) 生徒会保健委員会の啓蒙活動も地道に行った。(B) ウ) 感染状況の目に見える化(数値)は、例年インフルエンザが対象であったが本年度は皆無となり、コロナ感染症対策のための校内施策を何度も繰り返し直して、実践をしてもらうように呼びかけた。また、除菌スプレーや手洗い消毒液は例年ない使用量の多さであったが、感染症予防の一助になった。さらに、学校再開当初から除菌作業を全教員で行った。(A)	B
	50	教育相談体制の充実とじめの早期発見と対策。	ア)「こころの健康実態調査」(5月)と「いじめアンケート」(夏休み後)の実施と悩んでいる生徒の相談活動の充実 イ) 学年主任・クラス担任・養護教諭・スクールカウンセラー・教育相談担当の情報共有 ウ) 学年間で生徒の実態の情報共有とスクールカウンセラーのアドバイスによる生徒への対応	ア)「こころの健康実態調査」を例年5月に実施しているが、今年度は学校再開2週間後の6月中旬と1ヶ月後の7月に細かな内容で行った。例年との比較で数は増えていないが、マークシート方式を利用した結果マークミスが増え、個人面談を実施した生徒の中に、間違いであった生徒がかなりの数あった。(B) イ) KGH(教育相談・学年・保健室)と称して1年間、学年主任・養護教諭・教育相談担当及び管理職間で情報共有ができた。各学年の教育相談担当が必ず本会に出席できる体制づくりと、外部に繋いでもらうべきケース判断をどのタイミングで行うかが今後の課題である。(A) ウ) 今年度は、カウンセラーの松原先生に生徒も保護者も相当お世話になった。ケース会議を必要場合は開き、学年及びクラスとも情報共有を図った。(A)	A
生活部					



安全整備課	51	防災安全体制の強化。	ア)新防災対応の定着をはかる。(県防災アプリ・学校防災対応の活用) イ)防災に対する生徒の意識向上(避難訓練などへの積極的参加) ウ)防災保存食の適切な管理(内容の充実・入れ替え食品の有効利用)	ア) 防災対応の定着をはかる。(県防災アプリ・学校防災対応の活用) ・防災アプリのパンフレットの全校配布 ・新防災マニュアルへの導入 イ) ・防災に対する生徒の意識向上(避難訓練などへの積極的参加) ・コロナ対応で全校での2次避難はできていないが、学年別に対応 ・新1年生にたいして自身の通学路の安全確認の実施 ・球技大会時に学年別訓練 テント設置・消火訓練・搬送訓練・防災クイズ実施 ウ) ・防災保存食の適切な管理(内容の充実・入れ替え食品の有効利用) ・春先の休校期間中に多くの食品が入替を迎えたが、コロナの影響で多くの食品が必要とされ、すべて受け入れてもらうことができ、廃棄ゼロを達成	・新	A
	52	学校設備の維持保全。	ア)生徒環境委員会の運営(学校イベントごとの活動・月ごとの用具管理) イ)清掃活動の強化(用具管理の徹底・清掃点検) ウ)生徒用机イスの入れ替え準備・実施	ア) ・生徒環境委員会の運営(学校イベントごとの活動・月ごとの用具管理) ・コロナ休校後体育祭で委員が開催会場施設の消毒作業を行う。 イ) ・清掃活動の強化(用具管理の徹底・清掃点検)口 ・清掃用具の新規購入、新用具配置など清掃をしやすい環境を整備 ・清掃用具の配置を徹底し個数の管理を行っている ウ) ・生徒用机イスの入れ替え準備・実施 ・候補を職員アンケートにて決定 ・予算づくり・入れ替え計画・見積もり作成・新年度入れ替え準備開始口		B
進路指導課	53	進路シラバスに基づいた進路指導計画を実施するとともに、進路指導室の活用を促す。	ア)進路行事の目的を各学年進路指導課教員を通じて生徒に周知し、生徒の進路意識を高め効果的に実施する。 イ)教科や学び支援課との連携により、生徒の進路実現にむけて多方面からのバックアップを行う。 ウ)進路指導室について生徒に周知し、進路指導室に入室する生徒の相談に積極的に応じる。	ア)新型コロナ感染拡大によりいくつかの行事は実施できなかったが、模擬試験については感染防止策をとりながら実施した。		B
	54	大学進学数値目標達成のために、補講を計画・実施するとともにテスト分析とフィードバックの仕組みを構築する。	ア)補講系SGTを効果的に実施するとともに、高校3年生の夏期・冬期特別授業中の補講や家庭研修中補講の充実を図る。 イ)ファインシステムやコンパス、クラッシュにより、教員および生徒に振り返りの機会を提供する。 ウ)学年部との連携により、テスト分析会や講演会を企画実施する。	ア)平常授業日の放課後の補講および、夏期・冬期特別授業中の補講、家庭研修中の補講を実施した。 イ)小論文の個別指導を実施するとともに、新たに看護系小論文模試を実施した。		A
	55	大学入試改革に関する情報収集を行い、進路指導計画へ迅速に反映させる。	ア)入試改革に関する研究会に積極的に参加し情報収集に努め、得られた情報を全教職員に周知するとともに進路指導計画に反映させる。 イ)教員全体での小論文および志望理由書指導体制を確立する。	ア)入試改革や新型コロナ感染拡大による変更に対して、予備校や業者から情報を収集し共有した。 イ)主体的な進路選択ができるよう、適性診断や講義動画視聴を実施した。		B
学び支援課	56	SGT外部講師講座は、毎年新しい講座を加えると同時に見直しを図りながらコンテンツを増やし、体験を通じて学ぶものから学術的な講座まで広く提供するように努める。	ア)体験型学習の講座を少なくとも3講座は開講し、特に中学生の公的な作品発表の場を用意する。 イ)宗教学・心理学を含む人文学講座をさらに設置し歴史に学び生命の畏敬について考える機会を設ける。 ウ)大学の出前講座や研究機関、地元の有識者・有識者の出前授業を積極的に企画・活用する。	ア)『SGT ニュートンの林檎の木とジャム作り』を開講し、本校の『3本の智慧の木』の一つであるニュートンの林檎の木及びその他授粉用の林檎の木から収穫された林檎を使い、ジャムを作ると同時に林檎の木を含む『3本の智慧の木』について前校長の石田先生から御講演をいただいた。 イ)10月に実施したSGT Global Communication-第2回 原一夫先生との対話-素晴らしい人間とこの世界~東京ディズニーランド秘話~が多数の生徒を集め参加希望者があふれたため12月にRepeat講座を実施した。 ウ)色彩心理学を取り入れた英国発祥のオーラライト・セラピーを体験する基礎講座として『SGT自分の色ってなんだろう?』を7月に実施したが好評だったため発展的講座として8月に『SGTもっとなんか自分を知ろう』を実施した。		A
	57	SGT内部講師講座は、授業の枠を超えた分野の教養系講座をなるべく多く設置出来るように事務職員を含めた職員の協力をお願いし、生徒の授業以外の学びを支援するように努める。	ア)JMooocの新規講座をを確認し対応可能な教員がいるかどうかを課で検討し教科を通さず直接打診する。 イ)やる気のある生徒を発掘するため、教室掲示用チラシを早めに掲示し予定日を明示して極力少人数でも開講し対応する。 ウ)朝礼、放送を使った生コマercialによる宣伝、SGT blog、Classiでの情報発信を活発に行い、参加への勧誘を積極的に行うと同時にSGT掲示板の活用を工夫する。	ア)中学生を対象とした『SGT 中学生のためのOn-line職業講話』を林教諭により開講、普段あまりお話を伺うことが出来ない現場の方(例えば、ガリガリ君で有名な赤木乳業のアイスクリーム製造部の担当者)からZOOMを介して職業人としての生の声を聞くことが出来た。 イ)高大連携を念頭に置きJMoooc(日本オープンオンライン教育推進協議会)が主催する大学の講座(例えば、白川文学部への招待~漢字と東洋の歴史文化、心理学スパイラルアップ-多角的な視点からの接近、現代に生きるこどもの心理学等)を高校生を対象に紹介し受講を薦めた。		B
	58	緑風塾におけるClassiのより効果的な活用方法を検討する。	ア)Classiの活用研修に参加し、情報を共有しながらPortfolio機能のより効果的活用方法について検討する。 イ)教養系(特色系)講座の各講座について振り返りシートを作成しClassiを通じ生徒に配信する。 ウ)SGTのアンケート機能を活用し、緑風塾の振り返りについて簡単に集計出来るような仕組みを検討する。	ア)Portfolio機能の活用方法として振り返りシートを作成し記録を残すことを提案した。 イ)SGDsをテーマとし高大連携を意識した大学生との協同の学びを記録する場として活用を提案した。 ウ)生徒のPortfolio上の記録に対して教員が積極的にコメントをすることを提案した。		C
総務管理課	59	行事を丁寧に遂行する。	ア)クラス担任や学年、分掌、部活動の顧問など、それぞれの立場に立って式典や行事を組み立てる。 イ)様々な立場から検討して頂けるよう、十分な時間的余裕をもって、総務委員会及び職員会議に要項や資料を提出する。 ウ)本校の流れとして大切に継承するもの(伝統)と、「本校の常識」に囚われることなく新しに改めていくもの(革新)との両面から、式典や行事を見直す。	ア)3回に渡り実施した「一日体験入学」及び、述べ2000人近くの受験生及び保護者が参加する「入試説明会」では、でき得る限り、感染症対策をしながら実施することができ、学校の姿勢を示すことができた。 イ)2学期からは、始業式と終業式及び月一で行われる朝礼は、ズームを活用して実施した。部員が獲得した部活動の成績などは、できるだけ丁寧に伝達・表彰、壮行会などを行うことを心掛けた。 ウ)芸術鑑賞では、当初、1日1回公演で予定されていたが、感染症対策として、1日2回公演で実施できるよう会場を予約し直して、座席の前後を1席ずつ空けて鑑賞を行うことができた。		A
		ご縁を結び、絆を深める。	ア)本校を卒業し教鞭をとられている先生方に、在校生と同窓生を繋ぐ担い手として活躍して頂ける場として、同窓会の理事会や総会などを準備し、同窓会の活性化を計る。 イ)孝友誌は、誰に向けた何のための冊子なのか(編集方針)をハッキリさせ、目的に叶う記事の掲載に努める。退職した教職員との「かけはし」にもなり得るはずで、電子版での発行も考える。 ウ)PTAの活動の中に、保護者の気持ちを取り戻すことができ、かつ保護者に学校の取り組みを理解してもらえるような場を用意する。	ア)昨年度の全国高校サッカー選手権での優勝を機に、母校の発展を応援すべく同窓会をリフレッシュする機運の高まりを逃すことなく、4月には役員を一新し、11月には新聞広告も打ち、名簿の作成を進めた。 イ)「孝友」という冊子の発行にあたっては、編集方針を定め、「学校案内」との連続性と差別化を意識しながら、在校生、保護者、同窓生及び受験生に、学校生活の息吹を伝える冊子となるよう編集を始めた。 ウ)PTA活動においては、4月、総会を開かなければならなかったが、学校は全国一斉休校中であつたので、少数の役員会と全会員の文書による意思表示をもって成立させることができた。		A
	60	良質な文化資本を蓄積する。	ア)まずは一人として、生徒がその作品や活動に触れることにより、世界が豊かになるような、映画や舞台芸術、先導的な取り組みをしている学者やアーティストにたくさん触れ、文化資本を蓄える。 イ)上記アの体験をベースに、分掌の先生方と意見交換し、開校記念講演での講師や芸術鑑賞での演目の選定を行う。 ウ)第一線で活躍している様々なジャンルの方々を講師に、「大学訪問授業」と称した講座を長年に渡り実施(その成果は書籍にまとめられ出版されている)している神奈川の桐光学園に、コロナが落ち着いた頃、どのようにして講師を依頼しているのかなどなど学びに出かける。	ア)新型コロナウイルスの感染拡大が収束する兆しがみられないなか、映画も映画館での鑑賞が難しく、演劇や舞踏などの舞台芸術も公演の中止が余儀なくされ、文化資本にライブで触れる機会が著しく減ってしまった。 イ)来年度の芸術鑑賞は「音楽」になるが、演目選定にあたっては、演劇鑑賞が生徒と演奏者との交流の場となるかを重要な基準に選定した。手話などの企画も用意されている、ラテン音楽に決定した。 ウ)第一線で活躍している様々なジャンルの方々を講師に、「大学訪問授業」と称した講座を長年に渡り実施している神奈川の桐光学園に、新型コロナウイルスが落ち着いた折には、学びに出かけてみたい。		B

総務管理部	図書課	61	読書リテラシー、資料活用のための情報リテラシーの育成。	ア) 新入生に対する図書館ガイダンス。※ 休校明けに時期調整の上 イ) 図書館利用授業に際して、司書より図書検索の方法のレクチャー、オンラインデータベースの活用指導を行った。 (通年) ウ) 校内ビブリオバトル大会の開催、県高等学校ビブリオバトル大会への挑戦。 ※ 開催可否など要調整、用確認	ア) 休校明けの6月に中高1年生全員に対する図書館利用オリエンテーションを実施し、同時に「図書館ガイド/図書100選(冊子)」も配付して、読書や調べ学習における図書館利用を促した。 イ) 総合学習(緑風塾)や図書館授業に際して、蔵書検索のサポートや関連書籍のリファレンスを実施。また、案件によってはオンラインDBの利用指導や、他館の蔵書案内なども行った。 ウ) 毎月発行の「図書館のお知らせ(教室掲示/ Web掲出)」により、読書への関心を持ってもらうよう働き掛けた。	A
		62	生徒図書委員会活動の発展支援。	ア) 市立中央図書館との共催で「図書委員のすすめ！」企画(5月予定)。図書委員による選書とポップの作成と展示。(後期) イ) ビブリオバトル校内予選、チャリティー古書市の開催。※ いずれも文化祭=要調整。 ウ) 図書委員による店頭選書企画。※ 時期は要調整。	ア) 昼休みにカウンター一番手を割り当て、「貸出・返却作業」や「蔵書登録作業」など、図書館実務を経験させ、興味・関心を育てる試みを継続している。 イ) 書籍案内のPOP作成を課した。図書委員自身、本を読むきっかけを作りながら、多くの生徒の興味をひくようなPOPが数多く作成された。(昨年度から連休明けまで市立中央図書館での展示も実施) ウ) 図書委員有志により、月替わり展示の作業補助をもらったり、クリスマスには、委員会主催でアドベントブック企画を実施した。(図書館掲示コーナーや放送にて、関連書籍を紹介している)	A
		63	図書館利用活性化のための環境整備と広報活動を充実させ、家庭での生徒の読書推進をはかる。(コロナ休校対応=貸出数から読書推進にシフトする)	ア) 「図書館のお知らせ」を通しての読書啓蒙、話題や注目本の紹介。 ※ 今年度は、コロナ休校対応として、Classiなどでの生徒への記事配信を行っていく。 イ) ①新着本コーナーでの月次新着書籍の紹介、②西側展示スペースでの月次新着書籍の紹介、③中央掲示板での各種企画、カウンター前での時事関連注目書籍の紹介。	ア) 毎月の選書の充実をはかり、年間で約1,500冊の書籍を整備。「図書館のお知らせ」や通路側展示スペースで新着本を案内したり、読書への興味喚起を進めた。 イ) 昨年度から引き続きの事業として、ラーニングcommons(アクティブラーニングに対応できる学習スペース)を整備した。掲示や特集コーナーなども積極的に展開した。 ウ) ※ スタイホーム需要や総合学習(緑風塾)での活用も追い風となり、2月末の段階で、図書貸出数は昨年比120%以上、利用人数も130%以上と堅調であった。	A
	国際交流課	64	国際交流プログラムを活性化させ、生徒に様々な機会を提供する。	ア) 受入れ事業を安定させるために、ホストファミリーバンクへの登録を各学年20名以上確保する。 イ) 派遣事業における宣伝や説明等を強化し、希望者を確保する。 ウ) 英会話を学べる機会を確保するためのSGT等の充実。	ア) プログラム実施の可能性を探ったが、新型コロナウイルス感染拡大の影響で、生徒に国際交流の機会を提供することができなかった。 イ) 実用英語検定の二次試験の面接練習として、ALTや英語担当教員が対応した。	C
			中・長期留学生へのケアの充実。	ア) ALTによる中・長期留学生の日本語指導。 イ) 中・長期留学生への月1回のインタビューを通して、諸問題を一緒に解決する。	ア) 業者と打ち合わせをし、受入れの可能性を探ったが、新型コロナウイルス感染拡大の影響で、受け入れることができなかった。	C
		65	スケジュールの視覚化と業務の共有。	ア) 校内ネットワークを使用し、国際交流課作成の文書の共有。 イ) 各行事前、課員間でしっかりとコミュニケーションを取り合う。	ア) 業務の進捗状況を、メールを使って定期的に報告した。	B
事務局	総務課	69	財務状況の改善。(予算赤字幅の縮小を図る)	ア) 計上済み予算について事業の重要度及び優先度を再確認し、実施の是非を検討する。 能なものについては事業規模の見直し、次年度以降への繰越を行う。 イ) 見直しの実施を徹底し、支出の削減を図る。補助金や助成金等を積極的に活用し、収支の改善を図る。 ウ) 今年度入学生定員未充足42名分(高校△47名、中学+5名)の収入減に相当する45,000千円の削減を目指す。 ※削減額の45,000千円は事業活動収支改善と資金収支の施設・設備関係支出削減を合わせたものとする。	可 ア) 見直しの実施を徹底し、支出の削減を図る。補助金や助成金等を積極的に活用し、収支の改善を図る。 イ) 補助金の申請を積極的に行い、増収を図った。 補助金申請額: 約10,000千円 ※経常的な補助金は除く。 ウ) 本年度の目標である45,000千円の削減には至らなかったが、可能な範囲で最大限の収支改善を図った。	B
		70	施設・設備の更新、修繕工事等の計画的な実施。	ア) 今年度計画されている施設・設備の工事や修繕を再確認し、確実に実施する。 イ) 谷田グラウンドサッカー部室建替工事の実現に向け課題であった、がけ条例・市街化調整区域への建築許可・風致地区内行為許可申請・浄化槽の人手不足について解決の目処が立ち、建築業者の決定及び設計、各種申請まで進めることが出来た。今後、認可され次第、工事を実施(来年度)する予定である。 ウ) 学校グラウンド人工芝張替及びテニスコート人工芝・防球ネット張替工事について、テニスコートは予定通り竣工引き渡しを受けた。学校グラウンドについては、工事中に当初想定していなかった既存砕石路盤の固結が確認され対応を行った結果、工期が延びる事となったが無事竣工引き渡しを受ける事が出来た。	ア) 今年度計画されている施設・設備工事及び修繕工事の確認を行い速やかに着手した結果、ほぼ実施済みとなっている。 イ) 谷田グラウンドサッカー部室建替工事の実現に向け課題であった、がけ条例・市街化調整区域への建築許可・風致地区内行為許可申請・浄化槽の人手不足について解決の目処が立ち、建築業者の決定及び設計、各種申請まで進めることが出来た。今後、認可され次第、工事を実施(来年度)する予定である。 ウ) 学校グラウンド人工芝張替及びテニスコート人工芝・防球ネット張替工事について、テニスコートは予定通り竣工引き渡しを受けた。学校グラウンドについては、工事中に当初想定していなかった既存砕石路盤の固結が確認され対応を行った結果、工期が延びる事となったが無事竣工引き渡しを受ける事が出来た。	A
	学務課	71	学納金の確実な収納	ア) 生徒・保護者一年度始めに「授業料等納入計画表」を配付。 学務課→「授業料納付金収納状況」および「未納者一覧表」を毎月作成し、回覧。情報共有する。 イ) 例年の遅延者対応に加え、新型コロナウイルスに伴う家計急変者への対応。県の助成等の把握。 ウ) 就学支援金・奨学給付金・授業料減免制度・各種奨学金の把握。	ア) 年度始めに「授業料等納入計画表」を配付。毎月、引落を連絡する一斉メールを配信。 「授業料等納付金収納状況」および「未納者一覧表」を毎月作成し回覧。情報共有を行った。 イ) 遅延者には電話・手紙で連絡。寄り添った対応を心がけた。 3/1現在の遅延者 高校 4件 404,790円(昨年 7件 741,110円) 中学 0件 0円(昨年 3件 181,050円) ウ) 就学支援金・奨学給付金・授業料減免制度・各種奨学金の連絡。 毎年制度が変わるため、学務課内で随時確認を行う。また、配付資料はわかりやすい表現に手直しをした。	A
72		入学定員の確保(中学90、高校360)	ア) 静岡市内で小6の児童が150人減、志太地区では約240人減。コロナの影響で私立中学校フェア等の説明会の機会も減。個々をターゲットに個別相談の機会を増やす(来校/ ZOOM利用を検討)。 イ) 静岡市内で中3生が490人減。志太地区全体では72人程度の減。減少の多い焼津市、明誠のある藤枝市での確保が重要。WEB説明会・塾向け説明会の開催。 ウ) 探究系だけではなく静学の魅力・強みのアピール。アピールポイントの共有。	ア) 私学展等の中止により、随時受付個別相談会をアピール。管理職を中心に勤務時間外でも対応するなど尽力。 受付: 110、実施: 106(中学36、高校70) → 今年度の受付状況を生徒募集委員会で確認し、受付の多い月には日を決めて相談会を開催することとした。 イ) 「令和3年度高校入試における特待生基準等の拡充について」の文書を、校長名でHP掲載および体験入学等参加者にメール送信。附属島田中からの受験者が、一昨年度: 34名、昨年度: 46名、今年度: 68名と増加。併願生特待制度の効果かと思われる。 ウ) 高校入試 単願出願 213(152)、単願手続済 213(149) ( )内は昨年度の人数 中学入試 受験者数 152(133)、入学者 98(95) 2021/03/02現在の数字	A	
	73	総務管理部との協働	ア) 新しい分掌である総務管理部総務管理課と話し合いの機会を持ち、協力して進めていく。 イ) 必要であれば総務管理部長の定員確保委員会への出席依頼をする。 ウ) 初年度であるため、試行しながら教員・事務の分担を明確にしていく。	ア) コロナ禍での体験入学・入試説明会等の実施のため、今まで以上に教職員の尽力が必要になった。総務管理部と入試広報担当との打合せでたき台を作成、生徒募集委員会での検討、職員会議等での総務管理部長からの呼びかけにより、良いかたちで開催できたのではないかと。来年度に向けて引き続き改善していく。 イ) 総務管理部長の提案により、卒業アルバム制作会社の撮影物について、入試広報用は無償提供を依頼。快諾を受け契約書に反映した。 ウ) 総務管理部長と入試広報担当との関係が良好であり、良い環境で仕事を進めている。	A	